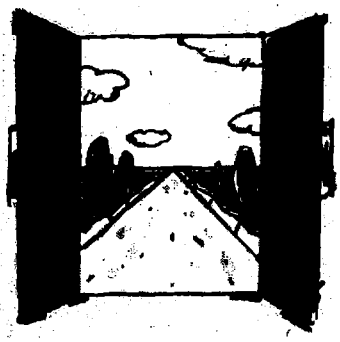
8/10(土) まいど！倫理号です。暑中お見舞い申し上げます、こうした困難は受け入れ側で大きく変る事なんでしょう、Aさんが素晴しい！ 幸せ運ぶマドー鳥

今週の倫理 1146号 2019.8.10 ▷ 8.16

長い人生航路において私たちは、小さな出来事から大きな出来事まで、いくつもの「困ったこと」に遭遇するものです。出来ることならば、困ったことは、きてほしくない、また今抱えている困ったことは、早くどこかにいってほしいと考えるのが、一般的な困難に対する認識でしょう。しかし、こうした困難を乗り切ることで、大きく人生が切り開かれるのも事実なのです。

8月のテーマ　困ったことから開ける道

社長の大きな愛に包まれて開かれた道



今年四十三歳になるAさんも、その一人です。Aさんは大学卒業後、県内の有名企業に就職しました。仕事は、たいへん忙しく、やりがいを感じていました。ところが、〈もっと自分の個性を発揮できることがあるのではないか〉と、悶々とする日々を送っていました。

そのような中、二十七歳の時に会社を退職し、自分の可能性を探すため、鞄一つで世界へと飛び立つことにしたのです。ワーキングホリデー制度を利用し、行く先々の国で働きながら、その国の文化を吸収していきました。そんな生活が一年以上続き、数カ国目にニュージーランドを訪れる機会を得ました。

そこで日本人が経営するラーメン店との出合いがありました。懸命に働くAさんの姿勢に、社長もラーメンの命であるスープ作りをAさんに任せるようになりました。ある日、いつもの様にスープ作りに精を出していたところ、やってはいけない間違いをしてしまいました。

それは、このラーメン店では、使用済みの油を空いた一斗缶に入れていたのですが、スープ作りに使う一斗缶に入った醤油と廃油を間違えてしまったのです。結局、廃油まみれのスープになってしまいました。

この時、Aさんは生きた心地がしませんでした。以前、日本で勤めていた会社では、この様なミスをする度に、上司から激しく叱責を受け、自分の言い分など聞いてくれる余地もなかったという記憶が蘇ったのです。

ところがラーメン店の社長は「ごめん、ごめん、これじゃ誰だって間違えるよね」「醤油と廃油、色は一緒だし、同じ一斗缶に入ってりゃ間違えるよ」「俺が悪かった。Aくんは悪くないよ」と言ってくれたのです。

その瞬間Aさんは、社長の大きな愛に包まれた感覚を得ました。社長の愛情を深く感じたAさんは、心が大きく動き出し、〈この社長のために働いていきたい〉〈いつか社長の様な男になりたい〉と決意したというのです。

それからAさんは日本に帰国し、ラーメン店を開業しました。ニュージーランドで出合った社長のようなお店にしたいと懸命に働きました。今では、国内九店舗、海外五店舗、社員全員が喜んで働ける職場環境になるように努め、また、化学調味料を使用せず健康に配慮したラーメンを提供しながら、お店を切り盛りしています。

現在では六年連続でミシュランガイドブックに選出され、昨年には東証への新規上場も果たしました。

Aさんにとってニュージーランドでの困難な出来事が、生涯の職との出合いとなり、経営の原点となったのです。

一般社団法人 倫理研究所 法人局

え・城谷俊也